



地球のいのちの営みと調和、融合して
共に生き合うコミュニティづくりの情報を発信する

いのちの森通信



公益財団法人
いのちの森
文化財団



Vol. 32
2015. Jan

平成27年1月1日発行
編集 山下 薫

発行/ 公益財団法人いのちの森文化財団 〒380-0888長野市大字上ヶ屋2471番地2198 TEL 026-239-0010 FAX 026-239-0011
ホームページ http://inochinomori.or.jp Eメール zaidan@inochinomori.or.jp

——金泰昌先生は錦秋の「いのちの森文化財団」・「水輪」を訪問して3日間滞在されました。ご感想はいかがでしたか。

金泰昌 わたくしはいのちの森・水輪に来る前に、一種の対比的なイメージを持っていました。都会は凡俗の凡人が日常生活を営む所。山の上の森は神々の住処。そのように想像してしまっていた。ではいのちの森・水輪に住んでいるのはどのような神々なのか？ それは穀物生産の女神と、健康と医療の男神です。

わたくしは小学生の時からギリシャ神話に親しみを感じてきました。ギリシャ神話には穀物生産のデメテル女神と健康・医療の神アスクレピオスが登場します。飯綱高原の水輪はデメテル女神とアスクレピオス男神の聖なる共働の森ではないかと思いついてきたのです。森というのは何となく神話的想像力を促発します。

ギリシャ神話との関連でもう一つ申し上げますと、わたくしは「水輪」という名称からヘリコン山の森の中にあつたと言われるアガニツペとヒッポクレネという二つの詩的靈感の泉のことを連想するのです。というのは、何時何処であつたかは忘れませんが、わたくしがずっと前に読んで深い感銘を受けた二つの詩——塩澤みどりさんの書いた詩が思い浮かぶからです。

「公共する哲学」の立て直しに必要不可欠なもの

一つは「音秘めさま」(原詩は「今夜の月があればいい」、もう一つは「真澄

いのち輝く哲学の森(1)

～新しい霊性の

公共する哲学を開く～

金 泰昌

(公共する哲学をともにする会)



みなごころ」という題の詩です。そこには、主に学者・専門家・知識人・市民社会の指導者そして企業経営者や官僚たちと一緒に語りあつた「公共する哲学(注1)」を立て直し、未来に開新するうえで必要不可欠なものが実在するといふ臆な予感が、今のわたくしにはあります。「男性の男性による男性のための哲学である」との指摘と批判を受け、わたくしは女性の女性による女性のための哲学を強力に主張し推進する女性哲学者たちと真摯な対話を交わし、男性と女性の「公共する哲学」を考え直すために最善を尽くしてまいりました。

まず、わたくしが刺激を受けたのは「音秘めさま」という詩との出会いです。それはみどりさんがかなり若い時に書かれたものではないかと思われまふ。これはわたくしの理解ですが、そこに書かれている「おとひめさま」とは音霊を秘蔵した姫様の夢のポエジーです。「音秘めさま」という漢字には、大宇宙に響きわたる真音を奥深く秘めたという意味が含まれているんですね。音秘めさま——それはいのちをうみ育む天地初発のときの産霊の音響にほかならないのではないかとこの感じがありますね。

そして、いのちの音霊がいのちの言葉に触れるときに初めて、いのちがまこと(真・実・誠)として光り輝き生命の真相が顕現する。そこではじめて真心が始動するのです。永年わたくしは、今日の日本の問題はまさにことばのいのちがこころのいのちと分離し葛藤し矛盾しているとこのころにあると考えてきたのですが、ことばのいのちが、こころのいのちと関連連動

するダイナミックな出来事の生起を夢見る森というのがわたくしがこの詩から読み取った心象風景でありました。また、過去と現在と未来が共に・互いに・そして素直に響きあう中今の森(中今)は「過去と未来との真ん中の今」(広辞苑)。そして最後に、それを持つてこそ本当の意味で生きられる信言(人と人がともに・たがい・まことに信じあうことば)のさきあう森であつてほしいという願いもありました。

あの風を呼んでいる…まさにその呼びかけに素直に応答する心情をもってこの森に来て泊まることにしたのです。皆と一緒に身と心の健康という幸福が実現される森

だからこころは「皆と一緒に身と心の健康という幸福が実現される森」です。それをひとこと言ううと《幸福の森》というわけですね。そして《音魂の森》です。それは、塩澤みどりさんの詩の中に出てきた「音秘めさま」ですね。音秘めさまがまことの言葉のみことさまに出あつて、過去と現在と未来がお互いに響きあい、繋がらあう。そのような世界を新しく開く…。そこで「音魂の響きあう森」というイメージが出て来ます。

もう一つは「真澄なこころ」という題の詩です。とりあえず「真つ直ぐに濁りのない澄んだ心」という意味ではないかと受けとめました。まず詩のはじまりは太古の人間のありように繋がるみどりさんの心象ですね。「昔むかし、人の心は鏡のように澄んでいた。緑の大地に花あふれ、夢あふれ、力あふれ、愛にあふれて、今日の恵みに祈りを捧げ、心暖めあつた祭りの夜、月の光に澄んだ瞳、自分を守る言葉はいらなかった。わたしたちの祖先はいつも自然と共にあつた。古の人々は太陽、月、光、風、花、樹、雲、鳥といつも生きていた」

——実際にここに来て泊まってみて、どのようなことを感じられましたか。金泰昌 それは、塩澤みどりさんの二篇の詩との新たな出会いとそこから体感した感動です。——感動というよりは「霊通」(17世紀中頃から18世紀の中頃を生きた韓国の卓越した儒学者で霞谷の創始者である鄭齊斗のことば)と言った方がいいでしょう。それは「歌いましよ・踊りましよう・いのちのひびき」と「さおりのうた」という二篇の詩です。ともに・たがい・まことに心を開いて歌い踊るところにいのちのひびきに出あう奇跡が起こります。そこに深山の霊気が流れ、祈りと光と愛と歌そして宇宙・すべて・世界がまるごと響きあう自己共働のよろこびが活かされる森の中だからこそ可能な「霊通」に、わたくしは改めて自覚めたという気がします。そして何よりも「さおりのうた」に接して、わたくしは鄭齊斗の「生理霊通」ということばの真実を体認することができました。

まことのいのちのはたらきを改めて見つめる —— それでは、今後のことで何かありましたら聞かせていただけますか。金泰昌 塩澤ご夫妻、そしてそこで

「風にさゆらぐ一輪の野の花に、神を見、流れゆく雲に、さえずる鳥に、神を見て、ひたすら手を合わせた。そこには祈りがあつた、感謝があつた、神に任せられる素直な自分があつた」。ここには太古の時代の人間の姿があるがままた見え隠れして、世俗の業と心を一切切去つて、自然まるつきり、それと共に生きていく人間の姿があるのです。それはまさに塩澤さんご夫妻の生き方であり、心の持ち方であり、魂の見目形ではないかと臆測していたのです。「さあ、私達の心は、遠い太古の昔に見た、あの風を呼んでいる」。

早穂理さん(注2)の部屋に入つておられる手をつなげた瞬間、わたくしに出来る唯一のことはただただ真心を込めて祈りをささげる他に何もありません。徹底的な自己無力。自己のすべてを超えたところから柔らかに降りてくる何か大きくてやさしい働きに訴えるしかなかった自分を確信したのですが、わたくし自身の無力・無能・無策が塩澤みどりさんの「さおりのうた」の詩霊によつて救われ、そこに感謝を覚えたのです。そこにはわたくしには欠けている女性の霊性もしくは母性的霊性のはたらきが実感されました。

注1 公共するとは対話する・共働する・開新するということです。自己と他者がともに・たがい・向きあつて、真実の相和と相解と共働を実現するための共働と開新の途を語りあう哲学であります。(金泰昌編著『公共哲学を語りあう』東京大学出版会より) 注2 早穂理さんは、塩澤早穂理さんのこと。塩澤みどり(当財団代表理事)、塩澤研一(当財団副代表理事)の娘さんで、出産時の医療ミスより前頭葉脳損傷という最重度の脳障害をおつてしまひ39歳の現在でも自分で歩いたり、食べたり、飲んだり、話したりなどができず、ほぼ寝たきりの生活を送つています。夫妻は、施設に預けたりすることなく、24時間体制自宅で介護しながら財団の活動を行っている。

いのち輝く哲学の森(2)

塩澤みどりさんの詩との出会いから 始まる新しい霊性の公共する哲学の森

働いていらつしやる方々との共感
がもてるのであれば、いのちの森・「水輪」をいのちをいかにあ
う哲学の森にしたいという期待と
希望と意欲が生じました。今まで
わたくしなりにとはともに・たがい
に・偏りなく対話し・共働し・開
新する「公共する哲学」を語りあ
つてまいりました。16年間200
0名を超えるいろんな方々と。し
かしそれは理性と感性の次元に集
中してはいたんだと今になって分か
りました。そこには霊性のはたら
きへの目覚めが欠如していたので
す。

わたくし自身の個人的な見解で
あることを前提として確認すると
いう立場から申し上げるのです
が、「公共する哲学」のすべての
立論と質疑と応答と認識と実践
が、からだところの次元に収斂
して、まことのいのちのはたらき
につながっていきなかつたのでは
ないかという気がかりを拭きできな
かつたのです。

そこで、まことのいのちのはたら
きを改めて見つめることにした
のです。それは一言で表現すれ
ば宇宙的生命力でありませぬ。個体
生命を超えると同時に、個体生命
をその奥底から支えている霊性で
す。

今回のわたくしのいのちの森・
「水輪」訪問をきっかけにして、
新しい霊性の公共哲学を、それも
反中韓の風潮が強まる真つ只中
で、あえて日中韓の公共する霊性
の哲学を皆様とともに真摯に語り
あい、それを将来世代に継承させ
たいのです。新しい東アジアを開
くために何卒よろしくお願い申し
あげます。

——ありがとうございます。
金泰昌 ありがとうございますま
す。

※金泰昌先生が本文の中で紹介さ
れた塩澤みどりの4つの詩を以下
にご紹介させていただきます。

①「音秘めさま」

夜空の星を見ていたら
音秘めさまが言いました
遥か下界を眺めては
命の音を秘めた人
そんな言葉に出会いたい
男の光に出会いたい

夜空の星は瞬いて
音秘めさまは言いました
月下の舞はすてきです
深山の森はうたいます
いのちのしらべ風にのり
あなたの言葉は真言です

夜空の星は微笑んで
音秘めさまは言いました
霧のまにまに見た夢は
言葉が心にふれた夢
まるで聖霊が側にいる
やつと女は男を得て
光の水を呑みました

そんな夜空のひと時に
音秘めさまは言いました
生きた言葉は命です
言葉は遥か世を越えて
過去も未来も現在も
今この時に響きます
他に何を求めましょう

いつそう夜空の星は輝いて
音秘めさまは言いました
天の言葉は光なり

すべてのいのちにふりそそぎ
慈愛の種を開きます
あなたの言葉は美しく
あなたの言葉で生きられる
※「音秘めさま」の原詩は「今
夜の月があればいい」

②「真澄なところ」

人はなぜこの世に生まれ
人はなぜ死んでゆくのか
それは この世に生を受け 魂を
磨くために
生まれ 死んでゆくのかもしれない
本当のことはわからない
でも こう思うと心が落ち着く
です

生まれ死んで また生まれ死んで
生き変わり 死に変わりする中で
少しでも自分の魂が あの青空の
ように澄みきつた
雲ひとつない 迷いのない心で
日々を送れるとしたら
なんとすばらしいことか

人間は自分が一番かわいい
自分がかわいいから
いつも自分を守ることはばかり考える
守ることがいけないのではない
自分を守ることだけで人生を終わ
つていく

（人間）というものが悲しいのだ
自分をまもらなくてもいい自分
自分をまもらなくてもいい世界
人を守るその自分
世界を守るその自分
そんな人を思いやれる
澄んだ瞳があれば

昔むかし
地球のむかし思いだして
人の心は鏡のように澄んでいた
みどりの大地に花あふれ
夢あふれ 力あふれ 愛にあふれて
今日の恵みにいのりをささげ
こころ暖めあつた祭りの夜
月の光に澄んだ瞳

自分を守る言葉はいらなかった
私たちの祖先は
いつも自然と共にあつた
いにしえの人々は太陽 月光
風 花 樹 雲 鳥と
いつも生きていた
風にさゆらぐ一輪の野の花に
神を見
流れゆく雲に さえずる鳥に
神を見て
ひたすら手を合わせた
そこには祈りがあつた
感謝があつた
神にまかせられる
素直な自分があつた

ここは優しかった
愛しい 助けあい 溶けあい
開きあい
やさしく やさしく
そして 許しあつた

さあ 私達のところは
遠い太古の昔に見た
あの風を呼んでいる
あの星の輝きを あの花のやすら
ぎを
あの太陽を あの月の光の音を
皆で舞つた満月の夜の
あの暖かさを

大自然の中に溶けて行く自分
それは
とても瞑想的な自分だつた

③「歌いましょう 踊りましょう
いのちのびびき」
あなたの心を開いて
歌いましょう
私の心を開いて
踊りましょう
歌うことも踊ることも
神性です。
私があつた命の響きに
出会うからです
上手か下手かは
大事なことはありません

どんな歌を歌つたか
どんな言葉を使つたか
そんなことに
宇宙は一切無関心
ただそこには歌がある
ただそこには愛がある
ただそこには響きがあり
あなたはとつても神性です

深山の霊気は流れます
月の光に森のしじまは歌います
みどりの大地に野生の樹々
光を浴びて鳥は飛び交い
さえずります
滝つぼに
流れる水は涼やかです
風にゆれている
一輪の花のさゆらぎ美しい
昇りゆく太陽に
山の峰々染まります
みんな歌です 踊ります
みんな命の響きです

鳥たちは自分の歌を気にしません
風にそよぐ野の花は
自分の姿を気にしません
月や星や太陽は
自分の光を気にしません
誰が聞いているかはいいのです
誰が見ているかはいいのです
歌いましょう
踊りましょう
あなたはとつても神性です
あなたが私の命の響きに
出会うからです

ここちよく
ほほなでる風のそよぎ
たんぼの花冠のせ
軽やかに 春の女神と さおり
たわむれ
まんまるな顔には
よろこび あふれ
何を話しているのか
時々恥ずかしげに笑うなずく

春の一日（ひとひ）
オブラートにつつまれた
やわらかな陽さしの中
この さおりの 安らかさは
この さおりの ほほえみは
銀河の中の小宇宙

この さおりの 寝顔は
この さおりの 瞳の中
銀河の中の小宇宙
夏のさおり
夏はキリギリス かまきり
虫鳴き声いっばいびびく
火祭りの太鼓の音が
湖畔の岸から
ドンドコドンドコドンドンドン
ドンドコドンドコドンドンドン
さおりの体が ゆれるよ ゆれる
みんなの体が ゆれるよ ゆれる
パツと咲いた 花火の輪っこに
さおりの笑顔がニコニコ

夏はキリギリス かまきり
虫鳴き声いっばいびびく
火祭りの太鼓の音が
湖畔の岸から
ドンドコドンドコドンドンドン
ドンドコドンドコドンドンドン
さおりの体が ゆれるよ ゆれる
みんなの体が ゆれるよ ゆれる
パツと咲いた 花火の輪っこに
さおりの笑顔がニコニコ

夏はキリギリス かまきり
虫鳴き声いっばいびびく
パツと咲いた花火の輪っこに
さおりの笑顔がニコニコ
さおりの笑顔がニコニコ

④「さおりのうた」
春のさおり
春あたたかく 小鳥 鳴き
雪どけの水面に 春の光 こぼれ
眠りからさめた 若葉の 匂い

秋のさおり
沈む夕日に さおりみとれ
いつまでも いつまでも みとれ
その影長く 後姿の輪をかく
金色のあかね雲輝き
すでにさおりであつて
さおりでない
さおりが 涯のない深さに
笑浮かべ
沈む夕日にみとれ
ほけたすすきの穂先に 赤とんぼ
すでにさおりであつて
さおりでない
さおりが 涯のない深さに
笑浮かべ
沈む夕日にみとれ
ほけたすすきの穂先に 赤とんぼ

金泰昌(キムテチャン) 一九
三四年 忠清北道出身。主な日本
語著書に『共福の思想』(GEC
出版、同新版)、『公共哲学』全二
十巻(東京大学出版会)の編者。
各巻の表題は1「公と私の思想史」
2「公と私の社会科学」3「日本
における公と私」4「欧米におけ
る公と私」5「国家と人間と公共
性」6「経済からみた公私問題」
7「中間集団が開く公共性」8
「科学技術と公共性」9「地球環
境と公共性」10「21世紀公共
哲学の地平」。11〜20巻は
各々「自治」「法律」「都市」「リ
ーダーシップ」「文化と芸能」「宗
教」「知識人」「組織・経営」「健
康・医療」「世代間関係」から
「考える公共性」。「物語論」。「公
共する人間」(全五巻)。「公共哲
学を語りあう」(ともに公共哲学
する)。(いずれも同出版会)ほか
多数。

旧友と飲む酒

私は、開業医ですから定年はご
ざいませぬ。大体、60、70歳ぐら
いの間に、私の高等学校の友達と
か、或いは、大学の教養学部の時
の友達ですね。大学の教養学部の
友達ってのは、皆医学部行く訳じ
やありませんから、薬学行ったり、
理学部の生物行ったり、農学部に
行ったり、いろいろいるです。そうい
う方たちが時々電話してくるん
です。いよいよ定年
だ、暇になったから、
あんたと一緒に飲
みたいと思うんだが
どうもいいか、どう
ぞって言ってやっ
てる訳ですね。で、
こちら懐かしいか
らね、喜んで川越の
町で飲む事もある
し、病院の職員食堂
で夕食を食べますか
ら、そこへ来てもら
う事もあるし。やっ
ぱり最初は物凄く懐
かしくて酒も美味い
んですけどね、途中
からね、あんまり美
味なくなつてく
る。いやー彼は、伸
びてないな、成長
してないな、と思
うとね、何かつま
なくなつてくるん
ですよ。

いのちの大学講座 養生塾・いのち学講義より

青雲の志

生と死を統合した聖賢な人への道

帯津良一

(帯津三敬病院名誉院長)



年までやって終わりで、何だか後
は面白くない。本当の青雲の志つ
ていうのは別の意味があるんじや
ないかと思つて、中国の古典を調
べてみた。そしたら、ある長い詩
の、序文みたいなのが中国はよく
くっついてるんですね。その中に
出てきたんです。その青雲の志は
何を言っているかというとな、
儒教なんです。儒教、儒学とい
うか。要するに儒学で徳の高い人
になろうとする志なんです。徳
の高い、聖なる人、賢い人。要す
るに聖賢な人
になろうとする志
を青雲の志と言
っている訳で
す。

青雲の志のなれの果て?

それでね、その時に思ったのが、
青雲の志って言葉ありますね。青
雲の志のなれの果てはこんなもの
か、つて思つた訳ですよ。人の事
だけで、そうやって見ると、内
に青雲の志ってのは日本では、未
だ博士か大臣かという立身出世
の志と思われてる。だから立身出
世の志と思われてると、確かに定

て、その徳の高い人つていうのは
どういう人だろうと思つている時
に、生と死の統合して事が思いつ
いたんです。

我々は、生と死をいつか統合す
る。この世で統合すれば、死ぬ時
に、向こうの世界に行くのが物凄
く楽になるんですね。だけどそん
な簡単にはいかない。そうすると、
死んでから向こうの世界に入つて
から統合する。こういうケースも
あると思う。いやそういう意味で
はね、どっちも、要するに、目標



楽しくて奥が深い帯津先生の講義

養老孟司さんとの対談を通して...

が前方にあつていい事なんです
ね。で、そういう意味で、生と死
を統合するという事をですね、そ
ういう志を青雲の志と呼んで、
我々の養生法の中で、生と死の統
合つていうのはとにかく一つの関
門として、その養生の道の中にあ
る。手前でやればいいし向こう行
つてやってもいいし。

手前であればいいつていうと、
そうすると、例えばですね、養老
孟司さん。養老孟司さんは私の一
年下なんです。東大の医学部で。
勿論、学生時代は全然付き合ひは
ありません。一年違うとね、あん
まり付き合ひないんですよ。：
ところが彼の活躍ぶりを見ると、
彼は解剖に行つたんですね、卒
業して。それはね、彼の「バカ
壁」だったかな、「死の壁」だつ
たかにね、そのあたりの経緯が書
いてあります。要するに臨床
の医者、患者さんを診る医者にな
る、簡単に言えば自信がなかつた。
人間丸ごとを見ていくという仕事
が如何に大変か、自分には向かな
いんじゃないか、そういう事だつ
た訳ですね。で、解剖に行つた訳
ですよ。

解剖は死体だけ相手にすりやい
いから、生きてる人を相手にする
より楽ですよ。ところが、彼が
物凄く頭良いと思つたのはね、彼

結構ね、色んな人がやりました
ね。：養老さんね、入つてきた
時は照れ臭そうにしてね、ちよこ
ちよこつと入つてきてふつと頭を
下げて座つちやつたんですよ。で、
私が挨拶して、初めの内は、何と
なく恥ずかしそうに喋つてたんで
すけど、最後に二人でカメラマン
が写真撮る時になつたら、一年違
いでですよ、やっぱり同じ時期を学
生として暮らした仲間つていう
ね、何とも言えない親近感が出て
きますね。彼の、あんな頭のいい
人がね、学生みたいな顔になつて
ね、一緒に立つて写真撮つたんで
す。

彼らね、言つてる事で、私一番
驚いたのは、死について、自分の
死について思い悩んだ事はない

夜勤の看護婦さんが泣いていた

泣いていた

て言うんです一回も。これは凄
いですよ。自分の死について思い悩
んだ事はない。何故か。自分の死
は実体がないから。確かに実体が
ない。だつて、大抵の人は意識失
つちやいますから死ぬ前に。カッ
と目を開いて意識ある人つての
は、そんなにはいない。
いない事はないですよ。今思
出したけど、一年くらい前に亡
くなった。この人は60歳で、直腸
がんから始まって、色んな所に再
発・転移を繰り返しながらね、頑
張つた人なんですけど、色んな治
療、全国こう、見つけてはやつて、
最後の所のへ来て、初め気功に通
つてきてたんですね。ところが、
通うのがしんどくなつてきて、入
院させてくれた。入院してから
も気功の時間帯には必ず出てま
した。それもままならなくなつて
車いすになつてね、車いすを出
きたりして。この人はね、ある朝
亡くなつたんですね。：亡く
なつたら必ず看護婦が私を呼びに
来るんです。：私がそこ行つて、
その、今死んだばかりの人と、ち
よつと一緒の座つて、暫く見送
てるんです。その時に、その
60歳ぐらゐの人の時は、やつぱ
り呼ばれたんです看護婦に。それ
でパツと部屋に行つて彼の傍に座
つてるだけいい訳ですから、行
つたら、ご家族は奥さん一人、そ
して夜勤の看護婦さんがね、3時
に目真つ赤にして泣いてるんで
すよ。夜勤の看護婦さんつていう
のはそう簡単には泣きませんよ、慣
れてますから。そりや、いつも真
面目な気持ちで死者に對するとし
ても、悲しみを涙を流すつて事は
プロとしてあまりないんですよ。

聖人は死に安んじ、賢人は死を分とし、常人は死を恐る

それで、思い出したのは佐藤一
斎の言志四録つて本にですね、死
に様つていう一行があるんです。
言志四録つてのはこんな厚い本
で、4巻に分かれてるんですね。一
番最初に出てくる、死に様。そ
こにどう書いてあるかつていうと
ね、「聖人は死に安んじ、賢人は
死を分とし、常人は死を恐る」つ
て書いてある、ただそれだけ、一
行。聖人、聖なる人、さつき言
つた、一番徳の高い人ですよ。こ
れは死に安んじつてのはね、死に
直面しても全く心が乱れない、安
らかである。何故かつていうとこ
ろの人は、生死を超越しているか
らつて言うんですね。それを佐藤一
斎が書いた。養老さんはさしずめ
これですよ、生死を超越する。養
老さんは聖人ですつて言つたら
いやーなんて言つてたけど。その

次、賢人は、死を分とし、分とい
うのはね、「本分」つて言うのでし
よ、「これは私の本分」とか。自
分のやるべき事つていうか、そう
いう事を言う訳ですよ。これは
賢人はね、生死を超越してない
んです。超越はしてないから、聖
人よりちよつと落ちるんだけど
も、これが、ただ、生者必滅、生
きてる人は必ず死ぬんだという事
を知っているから、死に直面して
も慌てない。安らかまでいかに
んだけど、あえて慌てない、とい
う事なんです。で、最後の常人、
常なる人、これは死を恐れて取り
乱すつて書いてある。
だから聖人の部類はそんなに
ませんね、私色んな人の死に付き
合つてきたけど。だから養老さん
凄いやと思つてたんですけどね。そう
いう事、死という事を考えてみて、
そうするとですね、生と死を統合
したつていう場合が、この今の聖
人の域になる。死に安んじ、死に
直面しても安らかであるつて言
うのが、生と死を統合するつてい
う事です。それを果たそうとする
志を青雲の志と言つて。私も養老
さんと喋つた時、言つたんですけど、
私も生と死を統合して死にたいと
思つてるんですけどね。自信はな
いですがね。あるつて言つたつて分
かりませんが、自信がない。自
信がないけど、そうやって時々、
統合してあの世に行く人が私の目
の前に現れますから、出来ない事
ではない。出来ない事ではないけ
ど、本当に出来るかどうかその時
になつてみないと分からない。だ
から私はもし出来なかつたら、死
後の世界に行つてからやればい
いと、そこで生と死を統合して暮
らせばいいと思つてるんですよ。
ね。だからそういう意味では、あ
まり固く考える事もないんですけ
ど、これが、やはり、我々生きて
死んでいくんでね、大事だと、思
つていく訳です。(平成26年11月
23日の講座より)

私たちが癒してくれた 大自然の力

新年を迎えて毎年思うことは「昨年
は激動の年であったな」ということ
でしょうか。
持って生まれた性なのか、どうも平
安な年を過ごしたことが少なかったよ
うに思います。でもその中でよくよく
思い返してみると35年前にこの飯綱に
来た頃のことを思い出します。
33歳でこの飯綱山に来たときは傷心
の苦しい思いを抱えての日々を過ごし
ていました。

もはや3人で野垂れ死
にして死んでいくことの
心境でしたので、胸を締め
付けられるような日々
を送っていました。

その私たちが癒してく
れたのは、この大自然の
力でした。春の芽吹き
の美しさ、夏のにぎやかな
虫たちの鳴き声、秋の紅
葉のあでやかさ、そして
冬は心が清浄になってし
まうほどの白銀の世界。
ただ息を吐いているだけ
でも心が静かになっていく
自分がありました。

飯綱山を見ながらわず
かばかりに開墾した畑を
耕し、取れた大根や野沢
菜などの味噌汁と玄米、
漬物というわずかな食事であつても感
謝して頂けるといふ静かな思いでいる
ことができました。

「生から死に至る全生活過程 に関わるいのちの響きあい」 を求めて

早いものでそれから35年、私たちも
68歳という年を迎えることになり、父
も母もこの世を去り、いよいよ人生の
終末への一歩ともいえる日々を過
ぎています。
さて、振り返って自分たちの人生と

新年を迎えて

塩澤 研一

(いのちの森文化財団 副代表理事)



八苦しながらも何とか務
めさせて頂いているこ
と、どれ一つとつてみて
も自分たちの意志を超え
たところで何か動いて
いるとしか思えない日々
を過ごしています。
30代は漠然と「意識の
大学構想」なるものを考
え、40代は水輪というス
ペースを作り、50代にな
って「いのちの大学構想」
とステージを上げ、60周
近になって「いのちの森
構想」として全開した流
れを作ったのです。
が、これも大いなる宇宙
の意志と調和した思いで
いた結果のこと、ただ
ただ感謝の思いの中にお
ります。

いのちの森文化財団はそもそも「生
から死に至る全生活過程に関わるいの
ちの響きあい」を求めてそれに必要な
ことを全包括的にやろうとの思いから
発して参りましたが、この「すべてが
ひとつらなりのいのちを生きている」
とのあり方は現在の行政における縦割
り社会では理解が得られない課題でも
あります。
従って私たちにとつては教育も医療
も農業も文化も経済も大いに繋がら
なくては存在しているの思いから、すべ
ての分野をトータルに関わるといふ流



飯綱に移り住んだ当時の山
での生活

れが出てくるのですが、縦割り社会の
中でははみ出た発想なのでしょう、か
なかな理解が得られません。
しかし人間は細かく臓器ごとに分解
してもそこにはいのちが存在しません。
繋がりがあつてこそ「いのち」が存在し
相互に生かしあつて生きているので
から、今後はこのようなホリスティッ
クな生き方、考え方が大いに啓蒙され
ていかなければならない時代に入るの
ではないかと思つています。

5月中旬竣工の予定です

みなさまから長年に渡りご支援頂い
て参りました「高齢者の生きがい創造
基金」により、昨年は旧N.E.C保養所
と北隣の宿泊施設の2棟を取得し、改
修工事に入っております。

財団全体の事業に供する「教育文化
施設」としての改修ですが、高齢者の
生きがい創造事業としての要素を加味
し、財団の事業の進化をはかつていき
たいと思つております。

現在、新潟の細金勝治様のご厚意で
床等に備長炭の炭塗装の工事をして頂
いており電磁波や化学物質からの影響
を除去できる施設としての改修をおこ
なっています。5月上旬ごろには完成
の予定となつておりますので中旬には
竣工になろうかと思つています。

その節はご案内をさせて頂く予定で
おりますが、その節はぜひご参集下さ
いますようお願い申し上げます。

予定としては5月15日(土)に帯津先
生の養生塾15周年を記念しての会を予
定しておりますので、それに合わせて
竣工式も行えればと思つております。
多くのアーティストの方々もおいで頂
けるとのことですのでどうぞよろしく
お願い致します。この間たくさんの方
から高齢者生きがい創造基金に対し
ご寄附を頂いて参りました。大変ありが
たく大事に使わせて頂いております。
今年も多忙な年となりそうですが、
お一人おひとりの人生が豊かに輝いて
参りますことを祈念してご挨拶と致し
ます。

2015年 いのちの大学講座 (学長 帯津良一・副学長 巽信夫) ~人生をよりよく生きる~

「心の探求 ~般若心経の真髓をひもとく~」
講師 宮島 基行 先生
(高野山真言宗阿闍梨 南山進流声明第一人者)
2015年 1月10日(土)~12日(月・祝)
8月28日(金)~30日(日)

「いのち輝く哲学の森でともに哲学する旅」
ガイド 金 泰昌 先生 (公共する哲学をともにする会)
2015年 5月7日(木)~10日(日)
8月20日(木)~23日(日)
10月1日(木)~4日(日)

「養生塾 ~体の養生 心の養生 食の養生~」
講師 帯津 良一 先生 (帯津三敬病院名誉院長)
2015年 4月10日(金)~15日(木)
6月5日(金)~10日(木)
9月4日(金)~9日(木)
選べる4つの養生塾参加コース：2泊3日ショートコース、3泊4日ベーシックコース、4泊5日リフレッシュコース、5泊6日自然治癒力アップ・しっかり養生コース

「いのち学」
講師 帯津 良一 先生 (帯津三敬病院名誉院長)
2015年 4月10日(金)~15日(木)
6月5日(金)~10日(木)
9月4日(金)~9日(木)

「生老病死のホメオパシー講座」
講師 帯津 良一 先生 (帯津三敬病院名誉院長)
2015年 7月31日(金)~8月2日(日)

「養生塾15周年記念 ~帯津良一先生感謝祭~」
講師 帯津 良一 先生 (帯津三敬病院名誉院長)
2015年 5月15日(金)~17日(日)

「心の病とやさしい心理学」
~心の病になぜなるのか 心の病は治るのか~
講師 井上 弘寿 先生 (精神科医)
2015年 4月19日(日)、10月18日(日)

「脳と心の勉強会」
~脳と心と体のつながりについて学ぶ~
講師 久間 祥多 先生 (脳神経外科医)
2015年 5月23日(土)~24日(日)
2015年 11月7日(土)~8日(日)

「気功合宿」
講師 中 健次郎 先生 (気功家・鍼灸師)
2015年 Aコース 9月19日(土)~21日(月・祝)
2015年 Bコース 9月21日(月・祝)~23日(水・祝)
自己変容のための合宿。気功で心と体を整え、真の健康・真の自己を取り戻しましょう。今回は二泊三日を二回続けて行います。内容は異なったものとなります。通してのご参加をおすすめしています。

「自然観察」
講師 塩澤 研一 (いのちの森文化財団副代表理事)
信州の美しい自然観察を通して環境問題を考える講座と実習。清掃活動も同時に行う。

「集中内観セミナー」【随時開催】
面接 塩澤 研一 (日本内観学会会員)

「リーダーシップセミナー」【随時開催】
講師 塩澤 みどり (いのちの森文化財団代表理事)

「青少年育成・自立支援個別相談事業」【随時対応】
相談者 塩澤 みどり (いのちの森文化財団代表理事)
アドバイザー 巽 信夫 (前信州大学医学部助教)

「こけ玉グリーンアートセラピー」【随時開催】

「いのちの森の学校」【随時受入】

「シーズンチャレンジボランティア」【随時開催】
長野市社会福祉協議会主催のサマーチャレンジボランティアへなどへの協力

「『総合的な学習の時間』の支援としての農業体験」
【随時受入】

※詳細はお問い合わせ下さい
いのちの森文化財団事務局 TEL 026-239-0010
※日程は変更になることがあります

公益財団法人いのちの森文化財団では 以下の公益目的事業への寄附金を募集しています

- ①「高齢者のための生きがい創造基金への寄付」
- ②「青少年の社会復帰と自立のための育成活動への寄付」
- ③「東日本大震災被災地の子供たちの教育を支援する活動(保育園へのお野菜支援含む)」
- ④「いのちの森の会費(一般寄付)」

※当財団への寄附金及び会費は、特定公益増進法人への寄附金として、所得税・相続税・法人税の税制上の優遇措置があります。また一部の自治体では、個人住民税の寄附金控除の対象となります。(詳細はお問合せ下さい)

【ご支援の方法】

- ▼郵便振替用紙にてお振込みの場合は、振替用紙に寄付先①~④をご記入の上、お振込み願います。
- ▼銀行振込み・電信振込みの場合は、財団事務局までホームページ・メール・FAX・電話(1ページ目参照)にて寄付先①~④をご連絡の上、お振込みをお願いいたします。

【お振込み先】

- ゆうちょ銀行振替口座
00520-3-42181
 - 八十二銀行 本店営業部
普通 1093531
 - みずほ銀行 長野支店 普通 1991794
- いずれも名義は「公益財団法人いのちの森文化財団」



信州産無農薬の支援
お野菜を丸かじりする
被災地の子供たち